



高野ムツ才選

闇市は消えボロ市は残りけり

松江市 三方 元

【評】闇市は闇取引の市。一般に終戦直後のものを指す。今は姿を消した。ボロ市は四百年の歴史があり、今も世田谷で健在。時代の変と不変。「けり」の感慨が深い。

ぼんこつを互ひに笑ひ去年今年

川口市 清正 風葉

【評】ぼんこつは使いものにならなくなった自動車のこと。「あなたでしょ」「お前こそ」と言い合う年越しの夫婦の長寿の音が聞こえる。寒に入るかつては浜辺の松林

神戸市 倉本 勉

【評】陸前高田のみならず東日本大震災で失われた美しい松原は数多いが震災前の面影はどこにもない。「かつては」の「は」の悲嘆が胸に響く。道産子の鼻息凍るその鈴

富山市 SADA OIZUMI

さびしさに目が慣れ雪虫が見える

豊中市 葉村 直

亡き兄の手帳に学ぶ接木かな

川越市 大野有之介

雲間から光ひとすじ薄氷

前橋市 中谷 博子

雪踏の一步一歩が子ら待つ

蔵市 渡辺しゅういち

葉牡丹の渦太陽を呑み込み

富士宮市 渡辺 春生

明日のことと思ひつ蒲団引き上げる

東京都 新海さよし

正木ゆう子選

水脈を孕む枯野の乾きかな

西東京市 永井 康信

【評】「孕む」によって、見えるはずのない地中までも、枯野が立体的に感じられる。生々しい「孕む」は、相反する乾きと対になり、枯野に生き物のような印象を与えている。苦戦して九十五歳日向ぼこ

成田市 神郡 一成

【評】九十五歳と日向ぼこだけなら目度さ一色だが、「苦戦」に万感が込められ、有無を言わせない。乗り越えて乗り越えてこられたのだ。ゴッホ展出で連の骨見て帰る

白井市 酒井 康正

【評】普通ならただ「破蓮」としてしまふところ、「蓮の骨」とは念の入った表現。骨はつて険しいゴッホの自画像まで目に浮かぶようだ。裏ごしの弱ひと匙もお節かな

大和高田市 鮫島しょうん

簗置は古墳のかたち年つづる

会津若松市 佐藤 秀子

自然薯掘る遺跡発掘する如く

町田市 枝沢 聖文

銀鼠の雨となりたる冬至かな

神戸市 吉野 勝子

老猿の膝抱きしむる時雨かな

四街道市 須崎 輝男

わたしには会ひに来るまい雪女

香芝市 山本 合一

おもむろに墓じまひのこと三日の夜

大阪市 大塚 俊雄

小澤 實選

鍋焼来あの自転車のブレイキ音

枚方市 秋岡 実

【評】うどん屋の出前が、自転車に乗って来る。家の前でブレイキをかけて止まる音が聞こえると、もうすぐ好物の鍋焼が食べられる。音と味覚が結びつくのがおもしろい。肩に猿轡せ猿回し帰るかな

東京都 永井 光子

【評】猿回しは正月の季語。猿を連れ家を訪れ、猿を踊らせて金品をもらった。「肩に猿轡せ」とあるから、しっかり芸を見せたようだ。真夜中のレール交換月夜ゆる

横浜市 塚本 文武

【評】鉄道のレールの交換は、電車が通らない深夜でないとできない。牙え牙えとした冬の月が、その大切な作業を照らしているのだ。スクラムや耳の潰れしラガーたち

大津市 星野 暁

三眼の旋回窓やラッセル車

倉敷市 中路 修平

菜園の大根間引き小指大

薩摩川内市 末永 芳子

やかんから熱燗の湯気もつり屋

日立市 菊池 三夫

忘年会寸劇入りの「天城越え」

狭山市 小俣 敦美

また年賀状じまいっていう賀状

小金井市 ひかるにゃんたろう

穴窯の吹き出す火災寒鼻

京田辺市 加藤 草児

津川絵理子選

初場所や龍舞きて富士数多

相模原市 斎藤やよひ

【評】なるほど龍や富士の字が入った四股名を持つ力士は多い。名前の字に注目して、力士が締めくくりに感じさせるところが巧み。初場所らしいめでたさもある。

横浜市 杉山 太郎

【評】世界各地で戦争が止まない。ウクライナでも兵士一人一人が新年を迎える。銃という具体的なものによって、句が現実味を帯びる。登校児一人のための雪を掻く

町田市 谷川 治

【評】登校する前に道の雪掻きをせねばならない。子一人のために家族総出でするのだらう。大変な作業だが、子を思う気持ちが伝わる。大凶を引く強運を初みくじ

奈良市 伊東 勝

質店の前で落ち合う初夜

吹田市 前田 尚夫

I hopeと始まる絵馬や初詣

武蔵野市 西林 哲

寒梅や石の声聞く六太衆

大津市 千川 修一

小刻みに千歩を歩む年新た

鎌倉市 中江 優子

山頂の祠にも鍵冬構

松戸市 早坂 哲夫

熊去つて静かに笹の立ち上がる

北本市 萩原 行博

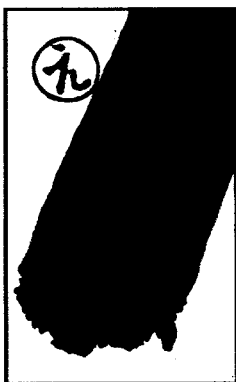
俳句あれこれ

藤田直子（俳人）

草田男と寒星

寒明けが間近だが、この季節に思い出す句がある。△オリオンの店の林檎が帰路の栄△。作者は中村草田男。「栄」は「栄光」を短くした言葉。幸いを約束する光、と言ひ換えられる。一日の仕事を終えて家路についたとき、澄んだ夜空にオリオン座を見つけた。視線を落とすと八百屋に艶やかな林檎が並んでいる。つましい暮らしの中で見つけた幸福感の句である。

星の句をもう一句。△寒星や神の算盤たひそか△。草田男が親友を亡くしたときに詠んだ句。海に近い所で夜空を見上げると、大小の無数の星が輝いていた。そのとき算盤を思い浮かべたという。かつては家庭でも仕事場でもよく使っていた算盤。人間が算盤でいろいろな計算をするように、人間の命の長さや宿命は神の算盤によるもの、崇高な神の力にすべてを任せしよと思ったという。森羅万象を司る造物主への敬虔な心の句として愛読している。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭